

## 【ラテン語】

### ラテン語履修案内

#### ・ラテン語はどのような言語なのか

ラテン語はもともと、イタリア半島中部のラティウム（Latium）地方で、およそ紀元前 800 年から使用されていた言葉である。ラティウムは古代の呼び名で、ほぼ現在のラツィオ（Lazio）州—首都ローマがある—に当たる地方であった。ラティウムで使われていた言葉ということで、ラテン語（ラテン語ではlingua Latina や sermo Latinus とする）と呼ばれるのである。ローマの政治的・軍事的勢力が拡張するとともにラテン語の使用地域も広まり、まずイタリア半島の共通言語に、次いで、地中海世界の西方、それにバルカン半島諸地域の共通言語となった。

言語学的には、ラテン語はインド・ヨーロッパ語族（印欧語族）の一員で、イタリック語派に属する。もともと、イタリア半島にはイタリック語派に属する多くの方言が存在したが、ラテン語が他の方言を駆逐し、唯一の生き残りとなった。インド・ヨーロッパ語族にはその他、サンスクリット、ペルシア語、ギリシア語、アイルランド語、ドイツ語、英語、スウェーデン語、ノルウェー語、ポーランド語、ロシア語などがあるが、ラテン語はそれらと親戚関係にある。そこでラテン語はこれらの言語と、数詞や人称代名詞などの基本的な単語と文法構造を共通にもっている。

金石文に刻まれた文字から、ローマ人は紀元前 600 年頃までには、ラテン語を文字を使って表すようになっていたらしい。もっとも碑文以外で残っている文献は、紀元前 3 世紀以降のものである。この時代から紀元前 2 世紀頃までのラテン語を、古ラテン語と呼んでいる。喜劇作家プラウトゥスやテレンティウスがこの時期に出た。

古典ラテン語と言われるのは、前 90 年頃から後 120 年頃までのものである。キケロー、カエサルといった散文の著作家、ウェルギリウス、ホラーティウス、オウィディウス、セネカからの詩人（セネカは散文も）、サルスティウス、リーウィウス、タキトゥスらの歴史家が輩出した時期だ。これら著作家が練って作り上げた、洗練された書き言葉が古典ラテン語である。古典期を過ぎてもなお数世紀の間、作家らは文語としてこれを尊重し、使用し続けた。

他方、人々が日常生活で使っていた話し言葉（口語）は、俗ラテン語と呼ばれる。広大なローマ帝国で、それは次第に各地域の方言に変化していき、最終的にロマンス諸語（イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語など）へと発展を遂げた。

中世のヨーロッパでは、中世ラテン語と呼ばれるものが主に聖職者によって用いられた。これは古典ラテン語の子孫だが、俗ラテン語の影響を受け、古典ラテン語からの変化が甚だしい。だが近世に入ると、知識人が古典ラテン語への回帰を志向したため、近世ラテン語は古典語に近いものに戻った。

このように文語としてのラテン語の歴史は長く、それはヨーロッパの共通語であり続けたのである。

## ・ラテン語を学ぶにあたって

現在、ラテン語は世界のどこであっても日常的にこれを話す人はいない（趣味としてラテン語で読み書き会話を行う人はいるが）。そこで、日常でのコミュニケーションの手段としてラテン語を学ぼうという人はまずいないだろう。しかし、ラテン語それ自体への興味から、またはローマ帝国に興味があるから、またはロマンス諸語の源であるから、または英語の語彙にラテン語系が多数あるから、またはローマ法や中世ヨーロッパの社会・歴史の研究のためなど、さまざまな動機でラテン語を学ぶ人はこの日本にも大勢いる。

ラテン語は発音で苦勞することはなく、まさにローマ字読みでよく、アクセントも規則正しく、英語などと比べると実に簡単である。だが、単語の語形変化がたいそう数多いため、覚えるのが大変、文法が複雑、という思いが学習を始めて次第に湧き上がってくるのが普通である。そこを地道に努力し、宿題を怠らず、初等文法のクラスを一年がんびり通すと、あのカエサル『ガリア戦記』やキケローの名演説が、辞書と首っ引きで何とか読めるようになるのである。翻訳でラテン文学を読むのも楽しく有益だが、その時代の言葉を実際に学ぶことによってのみ、2000年前の言語感覚は味わえるだろう。